



平成十八年九月二十日  
〒九三二〇八〇  
高岡市閭屋町四十  
有限会社 沖商店 発  
2015.9.20  
TEL 〇七六二一五二五五  
FAX 〇七六二一五二五〇  
E-mail info@oki-shouten.com

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょう』という二つを皆様と一緒に考え、意見を交換し合って、共に研鑽を深めて行きたい。そんな思いで本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無いご意見をお寄せくださいませ。

一 自然に委ねる

バブル崩壊以後の日本経済は長い低迷を続け、一部の業界・企業では回復基調にあると言われていますが、一般的にはまだまだ実感できません。我々衣料業界もご多聞に漏れずあまりぱっとしません。その上近年は、中国をはじめとする海外生産の波に押されて、一昔前とは大きく様変わりしています。国内生産の率はほとんど減り、今や国内の縫製工場・縫製工員は数えるほどしかなく、海外製品の補充機能として、特殊寸法やサイズ切れた品の緊急補給のためだけに動いている状況です。

これは、自社さえよければ良しとして、他社との価格差を求めて、我も我もと中国へ進出した結果です。いままら国内縫製能力を増そうとしても、縫製工に成り手もいなければ設備もありません。このままの形態では、今や盛りの中国の経済発展に伴う人件費の高騰で衣料品の加工賃を上げられても急には手の打ち様があります。しかも業界の過当競争により販売価格は年々下がる一方で、利幅も健全経営を支えるほどの余裕は無く、まさに生き残りサバイバルゲームの様相です。これは単に我々繊維業界だけに限ったことではないでしょう。このように各業界・各社とも余力のない経営状態の中で、この度の原油の高騰は日本経済に大きな問題を投げかけています。

先日、毛織物紡績会社では日本最大手の会社といわれている会社の営業員と面談しました。彼の会社は一般衣料もさることながら、官公庁・学校をはじめ大手

団体の制服の原反の供給者として、業界ではリーダー的立場にあります。

彼は「業界全体がお互いの過当競争で疲弊している中、この度の原油の高騰という決定的な状態を迎え、これ以上価格の過当競争をすべきではない。業界協力して価格維持に心がけ、競争するならば価格以外のサービスで競争すればどうか」と言います。

私は、今日、学生服の安売りを、社会への貢献の一つと考えて営業活動に頑張っていますので、彼のこの言い分には大反対です。「業界全体がお互いの過当競争で疲弊している今だからこそ、さらに今一步の価格競争で生残りをかけるべきではないか。旧態然とした輸送船団方式は、今現在優位にある者の意見であり、これから新たに参入もしくは伸ばそうとする者には圧倒的理論である。自由主義経済社会下においては、あくまで自由競争で勝負すべきである」と言いました。

彼は「日本の今の現状では、制服の値上げは至難の業であるから、販売価格は少しでも下げない努力をすべきだ」「安売りをする者の多くは薄利の為倒産する。倒産した本人はそれまでもかも知れないが、後に残って頑張つて行かなければならない者は大変である。販売価格が低くなった中では、自分も倒産の恐れがある」と言うのです。

私は「安売りする者が、皆倒産してなくなれば、ユーザーは、いやでも貴方の物を買うしかないのですから、『品物は私の物、お金は貴方の物、と言う考えの下』貴方が倒産しない価格で売ればよいではないですか」と主張します。

「自由に（自然に）任せ、その時々に対応して行けばよい」という私の意見と「そんな中でも話合いにより少しでも過当競争をなくすべき」と言う彼の意見、結局は、どれだけ話し合っても平行線で決着はつきませんでした。皆さんは如何思われますか。

二 酒飲み

「幾山河越え去り行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅行く」「白鳥は哀しからずや空の青海の青にも染まずただよふ」。旅と酒の生涯を生きた歌人、若山牧水の代表作である。珠玉の言葉は、今もなお人の心を捉えて離さない。数多くの歌を残したが、三分の一は旅をテーマとした。日に一升を欠かさず飲んだといわれる。酒を詠んだ名歌も多い。「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」はあまりにも有名だ。酒豪ぶりは親の血を受け継いだ

からだという。母も若いころは、一升酒の異名をとるほどだった。体をこわし「酒をやめた方がいいか」と、一度うかがいをたてたことがある。すでに八十歳近かった母は、言下に「お前の体は酒で焼き固めであるから、やめてはいかんぞ」としりぞけたという。▼きょうは牧水忌。昭和三年に亡くなった。「酒なしにけふは暮るるか二階よりあふげば空を行く鳥あり」。朝から飲み続けた人生を、肝硬変で終えることになった。享年四十三歳。亡くなるその日の朝まで日本酒を飲んでた。この時期は残暑がまた厳しい。遺体が傷まないか心配されたが、死斑さえ出なかつたらしい。結局、飲み続けた酒で、内からアルコール漬けになっていたからだろうと評判にもなる。母の言葉通りであった。

これは、平成十八年九月十七日付け、北日本新聞の二ページ、天地人の欄の抜粋です。私はこんなには飲めませんが、酒を愛する私の心と余りにも同情を感じましたので、紹介させて頂きました。

三 越中とやまの物語

「一発でかきを落した嫁さ」

石黒 漢子(桂書房「富山の昔話」より) むかしむかしあったとお。 あるところのあんまに、嫁さをもろたがいねん。 その嫁さな、器量よしで、優しゅうて、よく働くがで、姑のおっかはんも、婿さも、喜んどつたと。

さいど、三日たち四日たちするうちに、嫁さな、だんだん弱つてきて、十日もたつと、ものも食べられんようになつてきたとお。 おっかはんな、「おまさ、どうしたがや。どつかわるいがか。顔色青うなつてきたれど」と訊くと 「はずかしいはなしやれど、おらあ、尻をがまんしとるもんで」と、ちんこい声で言うがいねん。

「なんや、尻こがに、なあもがまんせんでもいいがやぞ。さあ、こかつしやい」 「さいど、おらの尻な、並みの尻でないがで」「かまわんちや、さあ、こかつしやい」 おっかはんな、そう言わつしやんもんやさかい嫁さも、「ぞうけ、そんなら、おっかはん、柱にしつかつとつかまつとつてくだはれえ」と言うて、土間のすみへ行つたかと思つと、ボワーン、と大砲のよな屁をこいたげ。

その勢いで、おっかはんな、あつという間に天井まで吹き飛ばされてしもうたとお。おっかはんな、

「こんなおとろしい尻と思わんだ。こりや、うちにおいとかれんな」と、あんまによう言い聞かせて嫁さを里へ帰すことにしたがいねん。 氣落ちした嫁さな、婿さに送られて、とほとぼ歩いて行つたげ。しばらく行くと、実の仰山なつとる柿林があつたとお。

そこでひと休みしとると、「エイホウ、エイホウ」と向うから、お殿はんの行列が来たがいねん。 お殿はん、どの木にもいっばい成つとる柿をみられて「ほう、こりやなんちゅう見事なもんや。だれか、この柿の実を一度に落すもんおらんか」と言われたげ。さいど、たくさんおる家来どもの中に、名乗り出るもん誰もおらんたとお。

そんな時、嫁さな、「おらが、打ち落として見せませうがいねん」と言うて出たがいねん。 「よおし、やらしてみせい」というお殿はんのお声がかかり、嫁さな、柿の林の下へ行くと、一発がっ放したげ。

すこい音なして、何百何千という柿の実な、いっぺんに、ザーザーと落ちて来たとお。 「こりや、見事じゃ、あつぱれじゃ」と、お殿はん、ほうびのお金をくだはれたがいねん。 婿さな、喜んで「そやそや、この銭で小屋建てて、おまさ、そこいっつでも尻こかつしやい。そつから、うちの裏の柿林の実も、おまさ落してくだつしやい。おっかはんな、柿が大好きやさかいのお」と嫁さを つれて、うちへ戻つて来たげ。

おっかはんな、好きな柿をいっばい落してもつて、腹ほうず(腹いっぱい)食べて喜んだし、嫁さも気がねなしに、小屋で尻をこけるようになったがいねん。そやから「へや」と言うようになったがいと。 語つてそうろう、語らいでそうろう。

筆者紹介 いしごろ・なみこ

一九一六年(大正五年)、富山市出身。東京在住。「富山の昔話」は、石黒さんが子どものころに祖父母や親戚の人、近所のお年寄りから聞いた話を基にまとめた著作。石黒さんの祖母の語り口による富山弁で書かれている。

平成十八年九月十七日付け、北日本新聞の二十三ページ、「直読に挑戦」と題して、富山弁での物語シリーズの抜粋です。声を出して読んでみてください。 有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘 個人メール E-mail 062525@oki-shouten.com

「にこにこ通信」の意見をはじめ個人的な連絡先(お問い合わせ)